



河渡輪中「水との たたかいの歴史」②

江戸期から明治期には、人々は輪中堤を造り、長良川や周囲の川からの浸水を防いだり、輪中内の水が滞留しないように排水する施設を造つたり、大変な努力を重ねてきました。その後も水害が続く中、人々はどんな努力をしたのでしょうか？

1. 木曽三川下流改修と上流改修

明治20年（1887）に始まった『木曽三川下流分流・改修工事』は明治45年（1912）に竣工しました。しかし上流域に位置する岐阜市域等は安心できるはずもなく、上流改修の必要性が叫ばれています。

大正10年（1921）、「木曽三川上流改修計画」が認められ、「境川・逆川のしめきり」から始まりました。

岐阜市周辺での主要工事は、昭和5年（1930）から同15年（1940）の10年間に行われました。

荒田川・境川等支派川改修、古川・古々川締切と右岸改修工事、岐阜特殊堤工事、長良川左岸（日置江・忠節橋）改修、長良川右岸（墨俣・穂積・河渡橋付近）築堤工事等です。

古々川締切と右岸改修工事、岐阜特殊堤工事、長良川左岸（日置江・忠節橋）改修、長良川右岸（河渡橋から橋付近）築堤工事等です。

残っていた長良川右岸（河渡橋から上流）の改修・築堤工事は、昭和21年（1946）から26年（1951）に行われました。



2. 伊自良川の付け替えと締め切り

長良古川と合流した伊自良川と長良川との合流点の付け替え及び新水路をつくる工事は、昭和9年（1934）

9月（1946）から26年（1951）に行われました。

長良古川と合流した伊自良川と長良川との合流点の付け替え及び新水路をつくる工事は、昭和9年（1934）

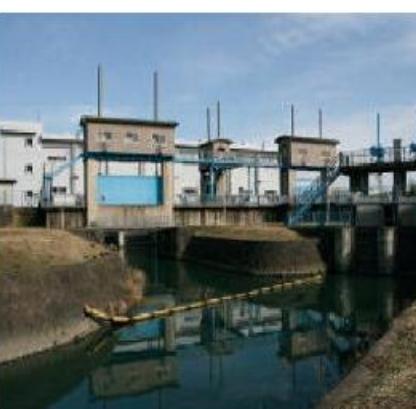
秒8000mに改め、それに応じた対策として大幅な堤防かさ上げ・川幅拡幅・河道浚渫（註1）を計画しました。まず昭和43年（1968）から五カ年計画で長良川左岸の鏡島の引堤（註2）が行われました。そして47年（1972）「長良川右岸河渡地区引堤計画」が発表され、建設省（現・国土交通省）は河渡地域に引堤の協力を要請しました。併せて県は新河渡橋のかけ替えを提案しました。

引堤計画の中に含まれる家屋の移転を余儀なくされる関係者は「岐阜市河渡引堤対策委員会」を組織し、規約を設け、移転補償の適正、住居移転の円滑を期しました。

河渡は低湿地帯で、昭和36年（1961）6月の豪雨ではこの二川流域に大被害が生じました。このような低地はどういう人が住める場所ではなく、移転先確保のためにまず改修工事が必要でした。

昭和45年（1970）9月に天王川の改修が始まり、岐阜市合渡南土地改良区も設立され、基盤整備事業も始まりました。

この流域の開発に伴い一層の抜本的対策が必要になり、二川の河川改修計画に対応するポンプ施設も新設するようになりました。糸貫川・天王川排水機場は、48年（1973）3月までに土木工事が終わり、



糸貫川天王川排水機場



改修された天王川

3. 昭和34・35・36年の三連年水害

昭和34年（1959）9月の伊勢湾台風、35年8月の台風、36年6月豪雨では、下流部のこの地区も大変でした。

昭和34年の伊勢湾台風では、伊自良川に架橋されていた寺田橋が流失し、当地域の家屋は浸水の大被害を受けました。曾我屋では毎年のように根尾川の水が氾濫し、横堤の堤防に延張りをして防ぎました。36年6月豪雨でも家屋は浸水し、水稻は冠水し畑作も大被害を受けました。



8. 根尾川の改修・排水機場の設置
昭和51年9月の洪水によって激特事業（註4）に採択され、根尾川の伊自良川への合流点は約1300m上流へ移されました。そして排水橈門と共に排水機場が設置されることになりました。昭和56年（1981）6月に完成しました。

（註2）引堤とは、川幅を拡げるため、既設堤防を堤内地側に移動させる事。

（註3）オイルショックとは、1973年の第四次中東戦争を機に発生した経済混亂のこと。

（註4）激特事業とは、洪水等で大きな被害を受けた地域で、再度の災害防止のため緊急に行う河川改修事業。

○この文章は、「岐阜県治水史」「岐阜市合渡の歴史」等をもとに、後藤征夫がまとめました。

4. 河渡の引堤と家屋移転

昭和34・35・36年の洪水では岐阜市上流で大きな被害が発生しましたが、下流部の河道にも相当の負担がかかり、危険な状態でした。昭和38年（1963）、国は長良川の計画高水量を毎秒4500m³から毎度をもつて完了しました。

昭和34・35・36年の洪水では岐阜市上流で大きな被害が発生しましたが、下流部の河道にも相当の負担がかかり、危険な状態でした。昭和56年（1981）6月に完成しました。

て犀川へ排水していましたが、サイフォンの流下能力に限度があつたためです。人々は鍬やスコップを持って来て、糸貫川の左岸堤を切り、天王川流域の水を糸貫川から長良川へ流そうとしました。しかし糸貫川左岸堤が切られると、右岸堤が危なくなります。そこで「切れろ」「切らせない」と糸貫川の左右岸の人々の間で騒ぎになりました。

一日市場の長良川本堤防が決壊寸前でした。曾我屋では毎年のように根尾川の水が氾濫し、横堤の堤防に延張りをして防ぎました。36年6月豪雨でも家屋は冠水し、水稻は冠水し畑作も大被害を受けました。



昭和36年豪雨・河渡付近